

樺太

悪の戦争と平和の尊さ

神奈川県 山名俊茂

まえがき

すっかり仕事を離れてのんびりし始めたここ数年、八月のお盆休み前後には娘家族が、娘婿のスムーズな運転による二、三日の気軽な国内小旅行に誘ってくれる。昨年夏も、孫娘たちの明るく屈託のない笑い声や、年寄りにはよく分からないが、綺麗で陽気に明るく響く孫娘選択のCD音楽を車の中で聴き、平和で美しい東北地方の田園風景を車窓から楽しく眺めながら、六十二年前の八月の出来事に一人静かに思いをはせた。

いつも旅行中に、手元に持ち歩く小さい鞆の中には、前日に受け取ったばかりの「平和の礎……海外引揚者が語り継ぐ労苦 十五」と、手帳を忍ばせてある。楽しい旅行の雰囲気損なうことのないように、小休止などの合間に、こっそりと六十二年前の記憶を手繰り寄せて手帳にメモしていた。

出発前に「平和の礎」をざっと読んだが、北満や北朝鮮から引揚げて来られた方々の、避難行で大変な労苦を偲びつつ、長年連れ添いし妻も子供たちとも、ましてやこの屈託のない雰囲気っぱいの孫たちと、あの史実、評価、感想を共有し理解するためにも、私の体験記録をしっかりとまとめるべき責務を感じていた。

この小旅行に出発する数週間前、長い間にわたっていろいろとご指導を頂いた会社の先輩から、その先輩が奉仕をしておられる前述の引揚げ体験記録の収録事業への協力として、私の樺太（サハリン）よりの引揚げ体験を記録・寄稿すべく依頼を受けたが、家族をはじめとして日本の次の世代のためにもと思い、少しずつ記憶をたどることにした。

一 平和な最果ての島と戦争の足音

長かった北国の寒い冬もようやく去り、遅い春の息吹を、ストーブを消した寝室にいる幼い私にも感じさせてくれたのは、浜辺を歩き交う漁船の、焼玉エンジンのポンポンと連続する破裂音と、その後を追って流れてくる、やん衆の威勢の良い「そうらん節」の目覚まし時計であった。

そこは、南樺太西南海岸の小さな漁港である兼港長の本斗町（ネベリスク）で、少し北に位置する真岡（ホルムスク）より南に約百キロメートルの所にあり、当時の樺太における有数の鯨漁場と

して栄えていた。春から初夏にかけて浜は一大活況を呈し、また真岡と共に樺太における貴重な不凍港でもあって、北海道や内地への海上交通の重要な要港として発展しつつあった。

私がこの田舎町で出生したのは、昭和九（一九三四）年八月二日で、既に満州事変が始まって三年が経っていたが、この北辺の平和な田舎町では、硝煙の臭いは皆無、どこ吹く風ということだった。父は三重県の山奥の田舎の出身で、同郷の先輩に誘われて俸給ベースのいささか良い、北辺の地方官吏として奉職し、そのころはこの漁業地に樺太庁所在地の豊原（ユジノ・サハリンスク）から水産担当として当地に赴任していた。

母は、豊原在の樺太地方裁判所の判事の次女で、現地結婚だったが、喘息持ちの病身で、四男一女の母親として厳しい気象環境の下で苦勞が多かったこととしのばれるが、祖父母からの援助もあったのか、下っ端役人の薄給ながら、家族一同平和で幸せな日々を送っていた。

私より十一歳年長の長兄は、既に豊原の中学校に在校していて、現地に下宿していた。家には、次兄、姉、弟と、くだんのお手伝いさんを入れて

七人が生活をしていた。時々このお手伝いさんが、朝早くすばらしくおいしい炊きたてのご飯のおこげで、お握りを作ってご馳走してくれた。当時は、私たち子供とお手伝いさんとの間の懐かしい秘密だったが、お手伝いさんがご飯を炊いたときに焦がしてしまった分が、私たちへのご馳走となり、綺麗な銀舍利のみが堂々とお櫃ひつに収まっていた、という筋書きだったようであった。

官舎のすぐ裏山には、海岸線と平行して西海岸を、久春内（イリンスキー）まで北上する鉄道の単線が通っていたが、田舎列車は減多に通らないので、線路に銅貨を置いて圧延のいたずらをしたり、線路の上の丘陵で短い夏の花や昆虫を追いかけたりなどしていた。田舎者の、いとも平和な遊び場であった。

しかし、私が三歳半ぐらいになったところになる

と、それより少し前に始まった支那事変の影響から、この人口もあまり多くない島からも、応召される者の出征が目につき始めた。

港まで大勢の大人に混じって、日の丸の旗を持って見送りに参加した記憶が、鮮やかに残っている。

四歳の夏だったと記憶しているが、父の樺太本庁への転勤に伴って、私たち一家も豊原に引越した。まだ幼かった私の頭の中には、あまり定かではないが、いささか賑やかな街に来たという程度の覚えがある。

住まいは、父がかねてから所有していた教軒の家作のうちの一軒に入った。豊原市東五条南六丁目で、庁立病院の東側だった。時期が少し遅かったので、既に幼稚園の募集も締め切られていて、幼稚園にも行けず、家の前にあった教会の日曜学校に行くぐらいで、毎日遊びほうけていた。

小学校入学の前年は皇紀二千六百年で、北国の寒気厳しい紀元節の当日は、奉祝の記念旗行列が

あり、私のような幼児までも雪中を歩かされた。

昭和十六年の四月、学区の豊原第二尋常小学校に入学したが、間もない最初の夏休みには、ノモンハン事件が起き、そのくすぶりが長引き怪しいということ、私と姉は北海道豊富温泉の母の姉の嫁ぎ先であった、嘉納家に預けられた。そろそろ寒くなるというその年の十月まで、その小学校に通っていた。ノモンハンの国境の情勢も完全に回復ならず、小康が続きそうなので豊原に戻されたが、世の中はだんだんと潤いのない厳しい空気が流れつつあった。

我が家と通学していた第二小学校との間には、子供の目には巨大に映った庁立病院があったが、その附属グラウンドを横切って行くのが、登下校の近道であった。下校時には、どこかのチーム同士の草野球の試合があつて、道草見物が多かったが、「そんな所で道草をするようなら、負傷して入院している兵隊さんのお見舞いにみんなで行つてあげなさい」と先生方に諭されたのも、こ

のころのことだった。

満州事変以来引き続く世相の悪化に追い打ちをかけるごとくに、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争に突入した。我が家では、長兄が旧制の水戸高校に入ったので内地に行き、優しくて親切だったお手伝いさんも、戦時動員令とかでいなくなり、その上さらに、父が東京の産業設備営団という統制団体に出向し東京に行き、家の中は急に寂しくなってきた。母は相変わらず病気がちだったので、家事は次兄と姉とが分担していた。私もいくらかは手伝っていたが、種々と大変だった。食糧・日用品等もだんだん不自由になってきて、日々の生活が苦しくなってきたが、そんな中で唯一、我が家にとって幸せだったのは、父が戻って来たことだった。

水戸高校から東大に進学して、東京でアパート暮らしを始めていた長兄の所に転がり込んだ父は、米軍による東京爆撃の激化や、食糧不足の深刻さに悲鳴をあげて、帰省願いを当局に泣きつけてい

たが、勝手な要請でもはや役所には復帰し得ないということから、民間の統制会社に職を得て、戻してもらえたのだった。終戦の前年のことであつた。

昭和二十年の春には、次兄も内地の学校に進学する段取りになっていたので、父が豊原に戻って来なければならない、病身の母と女、子供だけの母子家庭となつてしまい、下手をすると、例の「大地の子」になりかねなかつたことも考えられて、父の泣き言は家族のために元々見込みのない「出世」などを念頭に置かず、家族第一との考えで帰してもらつたという、暖かい読みの好事父帰るでした。下つ端でも、敗戦そして連合国による占領下に官僚でなかつたことも、後日遭遇した事件から見ても、多少の好運だったかもしれない。

昭和二十年になると、樺太周辺の日本の制海権も怪しくなつていて、次兄は長兄にならつて、旧制の水戸高校を受験するために、宗谷連絡船に乗る大泊港に早めに行ったにもかかわらず、米潜水

艦の出没のため予定どおり出航できずに、一期校である水戸高校の受験ができなくなつて、泣く泣く二期校である東北の米沢高等工業学校に進学せざるを得なかつた。

東京が猛爆にさらされた三月ごろになると、それまでは比較的のんびりしていたこの地にも大本営の華々しい戦果発表とは裏腹に、ぎすぎすした緊張感が高まり、旭川師団の主力が来樺し、兵舎も足らずに私たちの学校の校舎半分に臨泊するに至つた。戦争という緊迫感を、身近に受けるようになった。

いやな経験の例だが、ある朝、家事の手伝いをしている遅刻しそうになり、校門を駆け抜けて教室に飛び込もうとした際、校門横にある奉安殿への敬礼を失したのを、安全巡回中の先生と当番兵にとがめられて往復ビンタをもらい、大変な叱責を受けた。普段は、これぐらいのことですんなり方をする事のない先生だったが、当番兵なる「軍」の権威の手前もあつてか、普段は優しかつ

た先生までが、無理して狂人化しているような感じを受けて、悲しい気持ちでいっぱいになったことがある。

このころ私は、雨天体操場で実施した体育の騎馬戦で落とされて、その翌日から股関節がしびれだし、悪くするとカリエス化のおそれもあるというので、庁立病院で患部にギブスをしてもらったが、もうガーゼも手に入らなくなった。母は、看護婦さんに着物と交換する話をつけ、やっと手に入れていた。また、病室は傷病兵士で満室となっていて、早春のまだ寒さのこたえる廊下にふして、ギブスの乾燥固型化するのを待っていた。乾燥すると、馬車に乗って帰宅した。それから自宅で療養していたが、八月になるとギブスも割れて、取り替えに病院に行ったが、その時機ソ連軍の参戦、爆撃避難、そして無条件降伏による敗戦と、めまぐるしい情勢の変化で、カリエス化も素っ飛んでしまった。

二 ソ連参戦と終戦時の混乱

八月九日に対日参戦を宣したソ連軍が、北の国境を突破すると共に、北西海岸にも上陸したと伝えられ、出征兵士の留守家族優先で、内地への引揚げが開始された。連絡船の出る大泊港に向かう列車に乗るために、豊原駅前は大きな荷物を抱え、幼児を背負ったり手を引いたりした母子家族で大混雑となった。

出征兵士の留守家族でなく、また母子家庭でもない我が家も、やがてくるであろう引揚げ順番が果たしていつになるのか、あるいはこのまま戦いに巻き込まれるのか、逃げ場の無い島のこととて、不安のまま逃避行もならず、玄関脇の防空壕に、せつせとこれからの生活に役立ちそうな物を運び込んで、不安な心を紛らわせる数日となった。

八月十五日の昼、天皇陛下の終戦の詔勅は、我が家の性能の悪いラジオの前に、弟と二人は正座させられて、母と共に「ガーガー、ピーピー」という雑音のひどい中で聴いた。その当時は、折からの夏休みで私はギブスも取れて、家の中でのん

びりと遊び回っている最中だった。詔勅の内容は、ことさらに難解なお言葉で、我々小学生にはそのままではとても理解ができなかったが、途中途中で母の嘆き咽ぶ感涙の合間に、説明を受けて何とか意味を解することができた。

ほんの寸前まで「鬼畜米英を太平洋に叩き落せ！」と叫ばされていた「日本の聖戦」も、「敗戦」という結末で終わってしまったんだということが、幼い頭でもおぼろげながら察知できた。長年にわたって築いてきた生活の基盤をすべて失って、内地に追い返されることになった愚痴を、母は口の端々にのせながらも、半面では無理無益な戦争が終わり、家族のだれにも死傷者が無く「ほっ！」としたらしい雰囲気も感じ取れていた。

私の幼い頭の中には、これで防空壕に運び込んだ救急品を持って戦火の中を逃げ惑うこともなく、そのうちには兄や姉が行った東京を含む内地への修学旅行も、ひよっとしたらできるのではないかという、淡い期待を胸中に描くという程度の幼稚

さしかなかった。

終戦の詔勅からわずか一週間の間に、のん気でも無責任な僻地の田舎少年の生活環境は、激変してしまった。小学校に駐屯していた兵隊も、いつの間にかどこかに行ってしまった。この間に、北の国境から南下したソ連軍と、西北海岸に上陸したと言われるソ連軍と、日本軍守備隊の小競り合いの交戦が始まった。後日に知ったことだが、終戦前後の国際情勢などを全く知らされていなかった樺太の田舎の守備隊は、講和条約成立以前の進駐を拒否して抵抗したとのことだった。原爆投下で日本軍の無駄な抵抗の終焉を予期した、火事場泥棒的なソ連軍が、わずかな土地でも早い者勝ちとのことで、北海道まで遮二無二の先陣争いを米軍との間で目指していた意図などは、日本軍守備隊も微塵にも知る由がなかった。

八月も二十日ごろになると、多くの避難民が、北からと西からと続々と避難して来て、大泊を目指し駅前まで殺到して来た。

二十一日の朝になると、天気は良いのに遠くで雷のような音が聞こえていた。はっきりと砲声であると分かったが、家を捨てて逃げて行く当てもなく、不安な一日を過ごしていた。

翌日の八月二十二日午後三時ごろ、晴れ渡り透き通った青空を、いつもよりも不安な気持ちで眺めていると、飛行機の爆音が近づいてきたので、ほんの数日前までの感覚で、日本軍の飛行機が助けに来てくれたのかと思いい、身を乗り出して見えた。すると、ばらばらと何やら黒い物が落ちてきた。そして、何が何やら分からなくなり、いきなり顔を爆風が襲ってきた。その後、真っ黒な煙が舞い上がり、続いて爆発音が響いた。我が家の飼った猫までびっくりしたのか、右往左往していた。大慌てで玄関脇の防空壕に逃げ込み、爆弾の炸裂音に続いて「ぷす！　ぷす！」と不気味に繰り返される機銃掃射音が聞こえていた。音が収まるまでは、しばらくの間震えが止まらなかった。実際にはわずかの時間だったのだろうが、生涯を

通じて初めての恐怖の時間だった。

防空壕の入口の蓋を激しく叩きながら「逃げる！　周りが燃えているぞ！」と言う怒鳴り声で、恐る恐る入口の蓋を開けると、近所の警防団の人が、「すぐそこまで煙と火の手が押し寄せてきているぞ！」と知らせ回っていた。急いで救急袋を担ぎ、父と防空壕の入口の蓋に濡れ蓑と土嚢を乗せ、水をぶっかけて郊外の森を経て山に逃げた。執拗にソ連軍の戦闘機らしいのが、逃げまどう避難民に機銃掃射を浴びせるので、森の木立が密集した所の陰に日が暮れるまで隠れていた。

昭和十九年の春に、以前の家より少し広くて大通り西方に位置する家に引っ越していたが、駅前から北風にあおられた火炎は、我が家を包み込むのは不可避だった。

夜は九時過ぎまでも薄明かりのある北国の夏の夜であったので、ようやく日が暮れてから北東郊外の知人の農家に転がり込み、他の避難家族と共に一夜を明かした。翌日もまたまたソ連機の徘徊

が続いていて、^{がよ} 衯に悩まされながら静かになる夕方まで森の中の木陰に隠れていて、夜にはその農家に戻っていた。日本軍機はおろか、対空射撃一発の抵抗もなく、駅付近から起きている紅蓮の炎は、爆撃時からの北風に乗って、街の東西十分の一の幅で南半分の燃える物が無くなる地点まで焼き尽くして、自然鎮火した。結局、街の約二十分の一を焼いてしまったが、消火ホースは一本、バケツ一杯の水の消火努力もなままだった。

後日の記録（樺連情報六四一号 平成十五（二〇〇三）年九月一日付）によると、その日の来襲ソ連機はたったの六機、投下された爆弾六個、焼夷弾二十個と報告されている。日本の飛行機は、ソ連参戦と同時に「本土死守決戦用」として全機内地に避難し、「ポツダム宣言」で南樺太の全資産のソ連本国行きが知られている以上、命を賭して街を守ろうとする人も皆無だった。爆撃の危険下で、命懸けで避難勧告を叫び回った警防団の人たちの安否がどうだったか、知る由もない。

「戦後六十年」を扱ったある勉強会で、やはり満州からの引揚げ体験を綴られた方が「日本の軍隊は、国民市民を守らない！」というタイトルで書いていたが、「お国のために尽くす軍隊」と称した、そのお国は何だったのか？ 「一億玉碎」をわめいて結果生き残ったら「一億総懺悔」と叫んだ、当時の為政者たちの無責任さに、疑念を感じ得ない。

それにしても、米国による原爆投下を予知して満蒙国境に三百万もの軍隊を待機させ、原爆投下を合図にして日本に宣戦布告し、終戦後一週間で過ぎての火事場泥戦で、軍事施設や工場でもない、無抵抗な白旗を掲げている樺太住民への威嚇銃爆撃は、いったい何のためだったのか？ 多くの人をシベリアに抑留するための人質確保を狙っての、囚人国家としてのソ連らしい行為だったが、引揚げ避難民が殺到する駅前でのたった数発の爆弾で、何の罪もない数百人が死傷したと伝えられた。尊い命を亡くされた方々は、誠にお気の毒であった。

三 ソ連軍による占領

八月二十四日、丘から見下ろした街の南西部は、白煙か蒸気がくすぶるのみで、静かなたはずみだった。父は一人では心細かったのか、私の手を引いて街の様子を探りに出掛けた。途中、樺太を南北に走る大通りを西側に横切らなければならなかったが、そこには大勢の人波を、ソ連兵に銃を突き付けられながら日本の巡查が交通整理をさせられていて、その前をトラックに乗ったり戦車にまたがったりしたソ連兵が南進していた。初めて見るソ連兵だが、戦勝軍という格好の良さにはほど遠く、油と土埃で薄汚れた兵隊たちが、何とも言えない怪訝な眼差しで我々を見下ろしていた。

ああ、これで私たちは被占領民になったのだ、と子供心にも実感した。後日、「大半の兵は、少し前にヨーロッパ戦線終了と共に故郷にも返されずに、急遽ソ満国境に移動し待機させられていた」ということを聞いた。

父から聞いたことだが、「彼らは、早く北海道

以南にも進駐して、悪さを続けているアメリカから日本を解放してやるんだ」と、真面目にしかも親切顔をして父に話したとのことだった。父の苦笑いをしながらの話の思いつくと、彼らもソ連邦のデマゴグの単純信奉者だったのだろうと、今にして思う。

我が家の近辺は、跡形もなく灰じんに帰していたが、退避の際に父が命を賭して防空壕入口の蓋に濡れ簀と土砂、水をかけておいたお陰で、焦げ臭いながら類焼を免れた。布団や生活用品は、これからの寒さと飢えを凌ぐ、救いの神であった。特に、父が副業的に経営していた「銀狐養殖場」で、戦争の進展と共に次第に餌不足となり、栄養失調で大量に死んだ銀狐が、毛並不良で商品価値を失っていたのを、防寒用トラックに詰め込んで防空壕に保管していたが、これが後日、駐留して来たソ連軍将校の婦人たちとの食糧品交換に役立ち、栄養失調で死んだ銀狐が、我々の栄養失調を救うという皮肉な結果となった。

住む家も家財もなくした一家五人だったが、街の東南郊外で学校や官舎の立ち並ぶ一角には、既に家族が家財を残したまま引き揚げて残った戸主は、同じような環境の仲間の所に転がり込んで、空き家にしてくれた二軒長屋の一軒を借りることができて、何とか夜露を凌ぐ生活ができるようになった。

私自身の怪我也、いろいろな出来事で失念していたが、一応病院がどうなっているかと気になって見に行ったが、そこでぞっとするような光景に出会った。アプローチの両袖から半円形のカーブで上っていく玄関には、自動小銃を構えたソ連兵が厳めしく立っていて、とても中に入れそうにないので、裏側に回りかけた。すると、足許より下になる地下室の金網入りのすりガラスの割れ目から、蜜蜂の大群の羽音に似た異様な音がするのでぞくと、そこには地獄の光景があった。爆撃から一週間足らず、その地下室はソ連兵か日本人かは分からないが、死体放置所であった。異音は、

そこにたかる蠅・蛆虫の大群の集合的発音で、人間の尊厳を最大限に踏みこじる戦争悪の一シーンであった。六十年余りの今でも、脳裏から離れない。その瞬間から、股関節の痛みはすつ飛んでしまった。

四 共産国家ソ連邦抑留

周辺の校舎などがソ連軍の兵舎となり、占領直後の二、三カ月は、性悪なソ連兵が夜な夜な酒と女を求めて、日本人住居に押し込みを繰り返していた。そのたびに逃げ出しては、戸外の物陰や木陰に隠れる事態がしばらく続いた。女学校二年生の姉も、父に坊主頭に刈り込まれ、兄の古い学生服を着せられる有様となった。

ある日、引揚げずに年老いた父と残留していた近所の綺麗な娘さんが、服毒自殺をして遺体で見付かった。その前の日に、ソ連兵に暴行されたのが自殺の原因と聞いた。男装するのを嫌っていた目立っていただけに、女学生の姉も複雑な表情であった。私はまだ若い女性のデリケートな心理な

ど理解しようもない子供だったが、それでもなぜ日本の女性は簡単に死を選ぶのだろうか、もっと強く生きることができないのか、昨日まで戦火の中で生き延びるために、どれほど必死だったかに思いを馳せるにつれて、子供心にも疑念を感じたものだった。残された人のことを思うと、胸が張り裂けそうだ。

寒気が厳しくなりかけたある夜のこと、近所の年寄りの声で、「開けてくれ！ 助けてくれ！」という叫び声と、裏口のドアを激しくノックする音が聞こえた。急いで家に入ってもらい事情を尋ねると、途切れ途切れの話から、ソ連兵が押し入って「女を出せ！」と銃を突き付けて脅した。「ここにはいない！」と説明したが、そのソ連兵は納得しないので、仕方無く「天井裏に隠した？」とうそをつき、梯子を掛けて上らせたその隙に、ここに逃げ込んだということだった。その家では、娘さんと奥さんをその日に街の知り合いの家に預けたそうで、普段から目をつけていたそのソ連兵

が、何も知らずに押し込んで来たらしい。当時、続き長屋の隣家には、女の子一人を伴ったソ連軍将校の一家が住んでいて、隣家のよしみから多少の付き合いが始まっていたので、父が恐る恐る覚えてたどたどしいロシア語で取締りを依頼したところ、その将校は近くの憲兵屯所に父と老人を同道してくれた、とのことだった。だが、その間に暴漢のソ連兵とグルになって見張り役をしていたらしい別のソ連兵が、年寄りが我が家に助けを求めたことを察知して、家の補強した二重窓を叩き割ったり、これも頑強に補強してあった玄関ドアを壊し始めた。ほんの十分余りの時間だったと思うが、大変に恐ろしかった一瞬だった。憲兵隊のジープのヘッドライトに浮かび上がったそのソ連兵は、銃を乱射して逃げたが、間もなく逮捕されたとのことだった。

このようなソ連軍による占領のニュアンスも、このころから変わり始めてきた。十一月になると、夜な夜な日本人住宅に押し入って悪事を重ねてい

た程度の低い第一線部隊が入れ替わったようで、軍規も良くなり、街を歩くソ連兵の軍服も身綺麗になり、それと共に安全秩序も回復してきた。前述のごとき事件もなくなり、夜中に屋外に逃げ隠れをする必要もなくなった。

しかし、秩序や行政が整い始めると、今度は共産主義警察国家の陰湿で陰險な政治臭が強くなり、全員の身元調査があり、元警察官や元憲兵、それに田舎官庁でも上級職にあった人たちが拘引され始め、中にはシベリア送りになったのか、突然に消息不明になる人もいたようだった。

父もある日突然拘引されて、わずかに泊三日の拘留で頭髪を急に白くして帰されてきたが、父の経歴からすれば、官僚として拘引される身分ではないことは推定していたが、父の拘引中の留守宅には、気持ちの悪いG・P・U（ゲー・ペー・ウー）らしい三人が貧乏長屋にやって来て、従来からの病身に加えて終戦前後の混乱でやつれ果てている母に対して、いろいろと質問をしていた。

何でも、父が以前から内地に帰った祖父の財産管理を任されていたが、終戦以降の手許不如意から、終戦までの滞納家賃のある家や、融資先などから幾ばくかの家賃を集めてきたことを、一部の人間から密告されたのが原因のようで、「今後、ソ連邦国有財産からの家賃徴収は厳罰に処す」という厳重訓戒で戻されたようであった。拘留中に我が家に来たソ連官吏も、焼け出されて貧乏長屋で惨めな暮らしをしている我々を見て、共産主義国家の敵とはみなし得なかったことだろう。敗戦による混乱の下に、親切に家を貸してくれる人もいれば、同胞をソ連当局に密告したり、また父の融資で工場を建てた人が、「敗戦は徳政令だ」とうそぶいたりしていて、同じ日本人ということでも人の心は様々だった。

体制はかくも暗く陰湿で、ソ連人同志でも信頼し合えない雰囲気だったが、時が経つにつれて心を通わせ友達となったソ連兵や、近所に住み始めたソ連軍将校家族との片言交流では、我々日本人

に対して極めて素朴で明るく、日常生活の面でも随分と助けてくれた。ただ、体制と個々人の意識間の落差は極めて大きく、また体制内の人種差別も極めて大きそうで、ソ連軍の中でも佐官級以上にはアジア系の顔は全く見られないなど、子供の目からもどこに社会主義、平等国家ありや、という疑念は感じていた。

ソ連という体制の暗さと対照的なロシア人個人の明るさを認識し始めた子供心に、むしろ同胞である日本人が残した強烈な印象となる一件があった。我が家の裏に空き官舎となった二軒の家があり、たまたま日本軍の捕虜収容所として使用されていた。狭い所に二、三十人の兵隊が収容されていて、朝、ソ連兵に引率されて労役に駆り出され夕方帰って来て寝るだけという生活の毎日が繰り返されていた。捕虜とはいえ旧帝国陸軍の数十人が、我が家の裏にいるということは、小学校五年生の私にとっても何となく心強い支えとなった。そんなある夜、裏口を静かにしかも執拗にノック

クし、「開けてくれ！」と日本語で繰り返す声に、応えて母が戸を開けると、軍服姿の日本兵が一人、転がり込んで来て、「とにかく街なかに逃げ込みたいので、暖かい平服をくれ」と母に懇願していた。父が「ソ連兵に追われているなら、我が家にも搜索の手が及ぶ可能性があるから勘弁してほしい」と断ると、その兵隊は「今のところソ連兵とは無関係。現役時代は下士官だったが、今は毎晩昔虐めた部下からの執拗なリンチに遭っている。このままだと、近いうちに仲間に殺されそうなので、何とか助けて下さい。今晚中にそっと消えますから」と懇願された。母がなけなしの冬着を渡すと、初冬の暗闇に静かに消えて行った。汚れた軍服は、母が切り刻んですぐに燃やしてしまったが、裏の皇軍の兵隊さんとして私の脳裏にあった偶像が、音を立てて瓦解していった一瞬だった。学校は終戦と同時に閉校となったが、その後の残留生徒のために、これまた残留の先生方がソ連軍の抑留下でもライフワーク意識で、ソ連当局に

顔を下げつつ教室確保に苦勞しながら、閉鎖・開講を繰り返しつつ、引揚げ再開で一学年一クラスが成り立たなくなる昭和二十二年の始めごろまで学習が続けられていた。最後には、小学校六年生の卒業証書が交付された。そのお陰で、他地区からの引揚げ同学生が、新制中学入学を一年遅らされたケースが多い中で、内地の生徒と同じペースで進学することができた。毎日を生き続けるだけでも大変な当時の状況下でのこと、かの地の諸先生方には感謝の念でいっぱいである。

五 内地への引揚げ

一年半に及ぶ占領・抑留下での生活を経た昭和二十二年二月末の厳寒期に、引揚げの順番がようやく我が家にもきた。不凍港真岡での船待ちのため、約一カ月の収容所生活を強いられた後、やっと日の丸を掲げた「北鮮丸」に乗船できて、二日間の航海後に函館港に入港し、検疫・消毒・身元確認の戸籍調査のため日露戦争で大活躍し、当時係留中であった「信濃丸」に、約一週間留め置

かれた。

確か、北海道の桜の時期には少し早い四月八日ごろに、内地の大地を生まれて初めて踏ませてもらった。

真岡での一時収容所は、真岡港を北東から見下ろす小高い丘の上の小学校校舎だったが、ソ連式杜撰計画のとぼちちりで、豊原からその収容所に到着後も、先着組の乗船遅れから収容者で満杯ということ、真冬の雪の校庭で翌朝近くまで待機させられた。このとき、必死の思いで担いで来たトランクや、柳行李にもたれかかりながら居眠りしかけていた私の頬に、往復ビンタが飛んだ。「眠っちゃ駄目よ！」と言う母の声。いつも慈悲深くて優しくかった母。その母の、後にも先にも一生一回きりとなったビンタで、凍死から救われたのだった。

最後の乗船直前検査では、我々子供までが裸にされて、金目の物を探し一切取り上げていた。父のタバコケースに金メッキが施されていたが、そ

れも召し上げられた。收容所内放送で、「ソ連將兵と一緒に写した写真を所有している者は問題」との警告が流された。せっかくの引揚げ寸前でつまずいてはと、安全のために、空襲・罹災でもわずかに残っていた写真や、避難中に友人となり今後共に交信を誓ったソ連人の写真、住所なども処分せざるを得ず、残念であった。

一時收容所では、終始酸っぱい乳酸醗酵の黒パンと塩鮭のサンドイッチばかりが多かったので、「北鮮丸」で出された銀舍利のお握りは、格別な日本の味として六十年後の今でも忘れ得ないことの一つである。

だがもう一つ忘れ得ないことは、わずか二日の航海の間に三、四回もの水葬があったことで、年寄りか幼児だったのかの記憶は定かでないが、上陸目前で他界された方々は誠に残念至極で、お気の毒なことだった。北満や北朝鮮からの引揚者の中には、逃避行の中で背中に背負った幼子を亡くされたなど、筆舌に尽くし得ぬ悲しみのあったこ

とを伺っているが、今後再度繰り返してはならぬ悲しい歴史の一齣である。

六 新生日本における新生活

内地に無事命からがら上陸したものの、函館から兄たちのいるはずの東京までの旅程で、早速にこの貧乏家族の新生活の前途の多難を感じた。

まず、父が命懸けで父自身や私、弟の靴底を二重底にして隠し、持ち帰った旧円は、新円への切り替えて紙屑同然となり、函館での闇市の卵もリングも一個十円以上で、それぞれ五個ずつ買ったら一戸当たり千円支給の新円が、一割も消えてしまった。

奥羽本線回りで米沢で途中下車、米沢高等工業で就学中の次兄は、栄養失調で倒れどこの病院に担ぎ込まれていて、行方不明となっていて探すために一泊せざるを得なくなつた。頭陀袋ずだぶくろを下げた引揚家族を、旅館はなかなか泊めてくれずに困っていたところ、ある親切な学生が案内してくれて、やっと一夜の宿を得た。

やっと東京にたどり着き、東大三年の最後を「ふう！ふう！」言いながら生き延びていた長兄の下宿でも、食べ物無く、内地での隠居所として母方の祖父が建てていた、小田原の天神山在の広大な屋敷に転がり込んだ。祖父は既に亡く、祖母と叔母の女二人で、家屋敷の構えとは裏腹に内情は火の車、屋敷の庭を耕してサツマイモなどを植えていた。買い出しもままならず、就学への必要から姉と私を一時そこに預け、両親と弟は父の田舎の三重県の山奥に落ち延びて行った。

また、当時徴税が決まっていた財産税の支払いのために、いずれは屋敷全体、あるいは離れを残して母屋だけでも売却することは避けられず、小田原にいつまでおれるか検討中に、私は栄養失調になり、両親の後を追って三重県の山奥に行った。父が、隠居後の生活にと買ってあった幾ばくかの田圃は、農地解放での不在地主扱いで人手に渡っており、残った山の荒地の開墾と畑作をし、冬は炭焼きだった。借りた農家の納屋も、引揚者

に貸すよりも、闇米買い付けに来る闇屋に貸す方が割りが良いというだけで追い出されたりしたが、どうにか生き延びていた。

消息不明だった次兄も、ある日ひょっこりと来て、米沢高工も何とか卒業したということで、村の中学で代用教員をしながら大学への受験準備をして、名古屋帝大に合格し進学していった。その後もこの兄は、名古屋で夜間高校の教師をしながら、姉や私の高校進学のため、親代わりの経済的支援を続けてくれた。

引揚げ前よりは、経済的にははるかに苦勞の多い数年だったが、戦争初期の暗い狂信的な社会や、ソ連体制下での将来目標の全くつかめない抑留下とは異なり、各人の努力が必ず報われる、希望の持てる社会に変わりつつある新生日本で生きていくという信念が、日々を支えてくれた新生活だった。栄養失調のひ弱なやせっぽちも、小さいながらすっかり丈夫になり、精神的にも逞しさを与えてくれたのは、田舎での重労働生活であった。

かかる家庭環境で、中学・高校を四回も転入学を繰り返す羽目となったが、兄たちのお陰で何とか東大を卒業できて就職し、最後の弟も法律を勉強して、祖父の跡を継ぐと言って中央大学法科に就学できた。

兄たちの協力で我が家が建ち上がり落成したとき、引揚げ十一年、病身の体であちこち引つ張り回された母が、静かに息を引きとった。残る我が家族の落ち着いた幸せを見届けて、安心したかのようであった。